

ハートフル・とよひら



札幌市立かっこう幼稚園 第4号 令和8年3月13日発行

今年度、かっこう幼稚園では、子どもの経験や思いを家庭と共有し、それらをつなげていくことによる子どもの生活の充実と育ちについて、研究してきました。エピソード検討や研修を通して重点に迫ってきた今年度の成果を次ページにまとめましたのでご覧ください。

研究アドバイザーからのメッセージ

札幌国際大学 人文学部心理学科子ども心理専攻
教授 木村 彰子 氏 より



東京大学名誉教授の佐伯胖先生が書かれたある一節に目がとまりました¹⁾。「ときどき、『ああ、この人にはかなわない』と思う人に出会う。～略～長い年月をかけて、やっと『子どものように』まっすぐに物事を見る目がつちかわれ、『子どものように』まっすぐに反応するからだができあがったのである」という部分です。また佐伯先生の他の著書²⁾でも、保育者の専門性について、「保育者は、まさに子どもたちの生き生きとした生き様から、じかに『子どもらしさ』を学び、みずから『子どもらしくなる』、つまり『円熟する』ことを仕事とする」と述べています。

今年度もかっこう幼稚園でたくさんの豊かな事例に出会わせていただきました。その事例を提供してくださる「子どもらしい」「円熟した」先生方が、子どもの心の機微をおもしろがりながら語り合う内容は圧巻でした。そして今年度のテーマである「保護者」にも子どもが持てる力を存分に発揮している素敵な姿を丁寧に伝え、心を通い合わせ、その結果、保育者と保護者とがしっかりと繋がっていく実践を伺い、家庭教育を支える重要なポイントは3点あることに気付かされました。

- ① 保育者と保護者が共に、子どもの姿をいとおしく思いながらおもしろがり喜び合えること。
- ② 保育者が、保護者の思いを受け止め尊重しながら丁寧に関わっていくこと。
- ③ 子どもが子どもらしく居られる時間や場、受容的な大人の存在が、子どもの育ちにはとても大切だということを、保育者と保護者が共に感じ合うこと。

これまでの取り組みが基盤となり、次年度以降もさらに豊かな実践が展開されることを期待しています。

【引用】

- 1)佐伯胖(2003)。「根岸幼稚園の実践」から学んだこと。有賀和子+子どもと保育総合研究所編著、心をつなぎ時をつむぐ(巻頭言 pp. i - v)。ミネルヴァ書房。
- 2)佐伯胖(2014)。幼児教育へのいざない 増補改訂版 - 円熟した保育者になるために - 東京大学出版会。188。



今年度の研究の成果

園と家庭との『子どもの思いや経験をつなぐ』ための援助・環境の構成・発信

子どもが経験していることの意味・経緯・おもしろさ、教師の意図を伝える

子どもが伝えられるように

親子で飼育ケースを
のぞいて。
「見て見て!今日ね…」



家庭との経験の
行き来で豊かに

親子共通の話題になるように

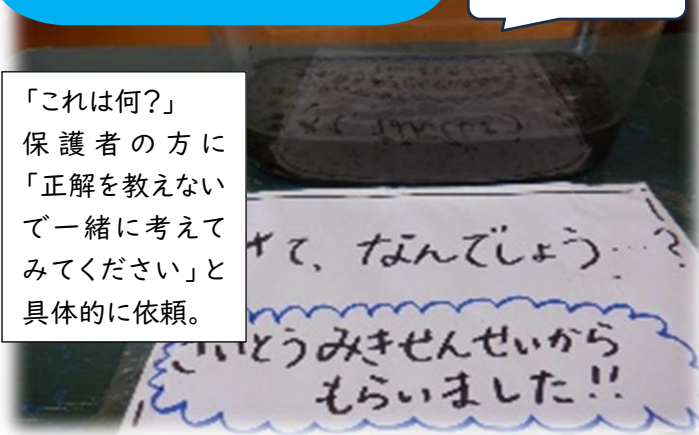
虫が大好き!「帰り道も虫を見つけて
教えてくれるようになりました。」(母)



何をするとよいかを具体的に

カエルの卵

「これは何?」
保護者の方に
「正解を教えない
で一緒に考えて
みてください」と
具体的に依頼。



家庭に持ち帰り、家庭から持ち込めるように

カイコを飼う。カイコの糸は絹糸。「うちでママと
シルクを探した!こんな糸を取りたい!」



見て分かるように

園での試行錯誤を日々、
実物と写真で掲示。



園と家庭で遊びが行き来できるように

家でママと続きを作ったよ。その
続きはまた幼稚園で!

